
てんし(for me)

塩こんぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てんし (for me)

【コード】

N0806H

【作者名】

塩こんぶ

【あらすじ】

二年間の入院を終えたマシは学校一有名なハルヤに親しげに話しかけられる。そしてマシの入院中に終わらない連続集団殺人事件が始まっていた。(サイコ系ミステリー) (女性向け)

1・てんしとは？

まるで天使みたいだ、と思った。

学校中で有名な彼は目眩がする程に優しい笑みで俺を見つめる。その距離は、遠い。俺はじっと息を飲んで綺麗な彼の顔を見つめ返した。綺麗な。美しい。まるで天使みたいだ。人間離れた銀色の髪が窓から入る赤色を反射しより神秘的に見える。見惚れる。綺麗な彼に見惚れる。目が離せない。誰も居ない放課後の教室、鳥が羽ばたく音が窓の外から聞こえる。赤い夕日が教室を染める。そんな中で窓際の席に座る天使の様な彼と、入り口でアホみたいに立ち尽くしている俺。これは一体何の因果なんだろう。

「久しぶりだね、マシ」

久しぶり？俺はお前みたいなのと会ったことはない。(いつ出会った？)(どこで？)そう問いたかったが、彼の口から滑り出した声色が余りにも美しかったので、結局俺は何も言えずにその場に立ち尽くしてしまう。何か言わなければ。どうしようも無い焦りだけが胸の中を駆け巡り、動悸が激しくなって冷や汗まで出て来た。足元をふらつかせながらもまだ彼のよく出来た顔を見つめる。彼は笑っていた。天使のような美しい笑みだった。その美しさは俺よりもずっと年上のモノの様に思えるのに、どこかあどけない子供を思わせるような笑顔でもある。純情無垢な汚れを知らない笑みだと思った。長い間停止した俺は意を決して口を開ける。掠れた声で彼の名前を読んだ。

「はる、や」

親しくもないのに。呼び捨てで彼の名前を呼ぶ。ハルヤは嬉しそうに笑って椅子から立ち上がった。がたん。イスが床と擦れる音がして世界が揺れる。俺は慌てて教室の扉を閉めて廊下を走り出した。怖かった。本能的に殺されると思ってしまった。だって、彼は余りにも、

天使みたいだ。

天使とは美しい容貌をした殺戮体である。見た目の美しさに反し、好物は憎しみに逆上した人間の肉。趣味は人に飴を振り撒いて信用させた後に崖から突き落とすこと。より不幸に、より醜く、より汚ならしく。自分の美しさをより引き立てようと、派手に残虐に人を殺す。そうして天使は美しさを増していく。悦びで心を満たして更に美しくなる。やがて美しくなりすぎた天使は自らを恐れ心を保てなくなり消えてしまった。

そんな神話がある。

美しい者には刺がある、という言葉の延長線のようなものだろう。美しさとは残虐・不幸の象徴だ。だからいつだって美しい人間は周りから恐れられ敬遠された。ハルヤもその中の一人である。彼はクラスの中でとても浮いている。彼が誰かと話しているところを見たことも聞いたこともない。寧ろ私物を隠されたりするなどの陰湿な嫌がらせを受けているらしかった。俺は学校の中のことについては、主にハルヤのことぐらいしか知らない。何故なら今までずっと病院に入院していたからである。耳に入ってくることと言えばこの区画で有名な仕手ハルヤの話ぐらいであった。近年稀に見る美少年で、天使の生まれ変わりだと噂されている。政府が機密に彼を監視しているだとか、笑っちゃうような噂ばかりを聞いた。それぐらいに人間離れしているらしい。だからすぐに分かった。あの教室で初めて会ったあの瞬間に、彼が仕手ハルヤなんだと、一目見ただけでそう確信が持てた。だから自分が彼を知っているのは別におかしいことでも無い。でも逆はどうだろう。おかしくは無いだろうか？自分は入学会の初日だけしか学校に行っていない。なのに向こうはまるで昔からの知り合いのように親しげに俺の名前を呼んだ。しかも呼び捨てで。俺は頭を唸らせながら思考する。二年ぶりに受ける授業はハルヤのせいで全く頭に入らなかった。

「じゃあ二人一組になってこの課題をやって下さい。課題データはX×Oファイルの…」

突然講師がそう言出したかと思うと周りが一斉に立ち上がる。そしてすぐに各々で楽し気にグループを作り始めた。勿論病み上がりの俺には友達なんて居ない。ちらりとハルヤの方を伺うと予想通り彼も一人でパソコンに向かって居た。周りにはハルヤを避けるように空席が出来ている。俺は気遣いの良い人達が誘ってくれるのを断つてそろりと席から立ち上がると、ハルヤの席に寄った。

「ハルヤ」

「あ、マシ…」

ハルヤは目を丸くして俺を見つめてくる。昨日俺があんな帰り方をしたもんだから驚いているのだろう。よくよく考えるとあれは余りにも失礼だった気がする。謝るにも既にタイミングを見失ってしまい、とても謝りにくい。いや、別に今謝れば良いんだけど。しかしハルヤの人間離れた青暗い瞳で見つめられていると、一々小さなことで謝るだなんて自分が卑屈のように思えて来てしまう。それにしても透き通った青色だ。どこまで人間から離れて行く気なんだお前は。

「隣座って良い？」

俺が無愛想にそう言うとハルヤは途端に嬉しそうな顔をして強く頷いた。

「うん、俺の隣なんかで良ければ」

「ハルヤの隣が良いんだよ」

椅子に座ってパソコンの起動スイッチを入れる。暗い画面が明るくなるまでの間、俺はぼんやりと隣に座るハルヤの横顔を見つめた。何故かハルヤは気恥ずかしそうに俯いている。ぴび、と突如目の前の画面から電子音が聞こえ、箱が光を灯し始めた。俺は前のホワイトボードに書かれたユーザー名とパスワードを入力してログインする。画面に指を添えて操作しながらも、内心こんな事をしている場合では無かった。ハルヤに聞かなければ。(何で俺の名前を知って

るんだ?) しかしいきなりそう聞くのもなあ。それに俺は何か勘違いしているような気がする。常識だった何かを聞こうとしているよ。うな、自覚のある無知への恥ずかしさの様なものが胸の奥からこみ上げて来る。それでもやっぱり聞かずに居られないので、俺は出来るだけ平静を装ってハルヤに話しかけてみた。

「なあ、ハルヤ。その…」

「何?」

ハルヤは不思議そうな顔をして俺を見返して来る。純情無垢な顔に言い表し様のない焦燥感が湧き、思わず何でもないと返してしまった。何と聞けば良いのか分からない。あの顔を見ていると、俺はずっと前からハルヤのことを知っていたような気にさえなった。

「報告くん」

「え?なに、」

放課後、急にクラスメートの一人に声をかけられた。俺は驚いて瞬きを繰り返す。彼女は明らかに嫌悪感を含めた顔でこちらを見つめていた。

「仕手さんと何話してたの?」

「何って…、いや何も」

「じゃあ何で今日のグループを作る時、仕手さんの所に行ったの?」

「え…?何か悪いかな…?」

困惑する俺を見て彼女は苛立たし気に口を開ける。

「悪くなんか無いよ。そんなに仕手さんと一緒に居たいなら好きにしたら良いんじゃないかな。じゃあ私からも報告くんのごと皆に言っとくね」

彼女は早足で他の友人達が待つ集まりの中へと戻っていった。そして俺の方を見ながら何かを耳打ちし合い、ざわざわと深刻そうに話し始める。俺は訳が分からないながらも、嫌なことをされたことだけは理解出来て不快な気持ちになった。ハルヤと居たから…?ハ

ルヤと居ただけであんな扱いを受けるのか…？俺はわざとらしく音を立てて席を立つ。そのままハルヤの席へと近づいた。

「ハルヤ、今日一緒に帰る」

「あ、うん、帰るー」

ふにやりと気の抜けた笑顔をハルヤが作る。一瞬にして教室の中の空気が変わるのが分かった。まるで俺がタブーを犯したかのような反応だ。仕方がない。俺は昔から、友達を作るのは苦手だった。

「病院での生活はどうだった？」

エレベータの中でハルヤがそんなことを聞いてきた。俺はんー、と唸り声を上げながらあの白い部屋を思い出す。二年間の月日をおの空間で過ごした。毎日が同じことの繰り返しで、途中から自分が生きているのかどうかすら曖昧になった。毎日、毎日、毎日。同じ部屋で特に動くことも無く、横になったまま白い天井を眺める日々。ビデオテープとそれを見るためのテレビはあったけど、そんなもので退屈を間際らすことが出来たのは最初の一ヶ月程度であった。その後はもう駄目だ。自分はこんな所で何を無意味に生きているんだろう、と返って暗い気持ちにさせられた。答えが出ない苦しみ。廃人、という言葉が頭から離れなくて、疲れる程に周りに気を遣った。そしてそんなことがストレスになる自分にまた苛立った。とにかく生きていく意味が欲しかった。あの時の自分には理由が必要だった。白いベッド、白い壁、白い床、白いヒト、あか、い。途端、ノイズ。

ハルヤが不思議そうに俺を見つめる。

「…退屈だった、それもかなり」

「まあ…だろうね。何か楽しかったことは？」

「しろ、はっきりだったから…違う色を見た時は楽しかったな。黒とか、青とか、オレンジとか、とにかく濃い色」

「へえ？変なの、変わってる」

そう言ってハルヤは苦笑した。しかし余りによく出来たパーツでやられると不快な気持ちはしない。

「お前に言われたくねーよ、この人間離れめ」

俺は明るく笑って自分より背の高いハルヤの背中を叩いた。ハルヤは驚いて変な声を上げる。

「うあっ?…酷いなあ、俺は人間だよ!」

「ひひ、どうだか」

「どうという意味だ!」

報答くん、ちょっと後で話があるんだけど。

嫌な予感がした。だけど断る理由も思い付かなくて、結局俺は相手の言葉通りに頷いてしまう。放課後に旧図書室に来て。恐らくそこに居るのは二人や三人ではないのだろう。もしかしたらハルヤ意外のクラス全員かもしれない。横で話を聞いていたハルヤは不思議がっていたけど、俺は大したことじゃない、とだけ言っただけ詳しいことは話さなかった。ハルヤの傍に居ることが罪だと言うのなら、俺はその罰を受けるべきであろう。何故なら俺は欲深い人間だからだ。

旧図書室には案の定十人ぐらいのクラスメート達が待っていた。

俺を見るや否や例の女子が真っ先に口を開ける。

「仕手さんは天使だよ」

「それさ…本人には聞いた?」

「聞くわけないよ!そんなことしたら、殺される」

ころされる、震える声でそう彼女は呟く。俺はその反応にイライラした。ハルヤは人間だ。人間以外の何でもない。殺すわけが無いじゃないか。何でそんな酷いことを言うんだ。

「ハルヤは、良いやつだ。だから、俺は好きだし、」

「報答くんは知らないから!二年も病院に居て仕手さんのこと何も知らないから、だから、そんなことを言えるのよ!どうして分かってくれないの!?殺されるかも分からないのに!いつどんな方法で、

おぞましい殺され方をされるのかも分からないのに！もう嫌なの、私達は誰も死なせたくない！あの子みたいなの、殺され方、いや…」

突然のヒステリックな叫びに俺は驚いて思わず息を飲んだ。彼女の叫び声に誘発されたのか周りのクラスメート達もがたがたと震えだし、尋常じゃない怯えの色を瞳に見せる。何なんだこの異常な空気は？今すぐこの部屋から飛び出したい。

「…何の、話をしてるのか分からない。死ぬって…どうして？あの子って誰？」

「約束して。仕手ハルヤとはもう関わらない」

訳も分からずに必死の形相でそう迫られて、俺は少し泣きそうになった。

「だから、どうして？ハルヤは天使じゃない！あんなの迷信だ」

「お願い、約束して。仕手ハルヤは天使なの。側に居たら殺されるの。もしかしてあなたは仕手ハルヤを人間か何かだと勘違いしているんじゃないの？」

「ハルヤは人間だ！約束はしない！」

「お願い、我が俣言わないで…」

弱々しく女子が僕に懇願する。何を言ってるんだコイツらは？頭がおかしいんじゃないのか？天使だなんて、そんなの神話の一つに過ぎないじゃないか。何でそこまで必死になってるんだ。約束してどうなる。まさか、コイツらは本気でハルヤのことを天使だと思っているのか？どうして？おかしいのは俺なのか？ハルヤを普通の人間だと思ってる俺の方が間違っているのか？ハルヤは本当に天使なのか？お前らの方が正解？

「約束して！」

「い、やだ」

男子の一人が耐えきれずに俺の胸ぐらを掴んだ。そのまま派手に殴り飛ばされる。その拍子に本棚に強く頭を打ちつけた。床に転がりながら激痛に唸っている、頭上から焦った男の声が降ってくる。「頼む、約束してくれ。じゃないとまたお前を病院に送らせなきゃ

ならないんだ」

「嫌だ！」

男子は悩むように唸ってから、思い切り俺の足を踏みつけた。完治していない足首が悲鳴を上げる。余りの痛みに涙が出た。苦しくて息が出来ない。何故か当の男子も泣きながら俺の足を踏み潰すように押し付け続けた。狂ってる。この世界は狂ってる。俺は泣きながら悲鳴を上げて、痛み之余り意識が遠退きそうになった。ぐらぐらする視界の中無理やり顔を動かして足元に目をやる。真新しい赤い血が少しずつ床に流れ出ていた。全然治っていなかったのか、俺の足は。この期に及んでまだ馬鹿みたいなことを考える。真つ白に変わる視界の中、誰かの聞き慣れた声を聞いた気がした。ああ、この綺麗な声は、ハルヤだ。

一瞬俺は意識を失ったのかと思ったが、別にそんなことは無かった。視界に色が戻ってくる。しかし足首から走るとんでもない激痛に冷や汗が止まらない。俺は荒く息を付きながらも、目の前に立つハルヤの顔を見つめた。ハルヤは怖いぐらいの無表情でクラスメイト達を見据えている。青暗い瞳で見つめられ、思わず周りの息が詰まった。恐ろしいぐらいの静けさが室内に漂う。美し過ぎるが故に色の無い表情は信じられない程に恐ろしい。ハルヤはいま何を考えているのだろうか。そんなこと、俺には到底解り様が無かった。青色の瞳が一切の感情を拒絶する。長い静寂の後、ハルヤがいつになく低い声で震えながら呟いた。

「俺を天使だと、そういう風に思うなら、こんな下手なことはい方が悪い」

誰も何も言わない。俺だけがせえせえと荒い呼吸を繰り返していて何となく間抜けだ。ハルヤはそれだけ言うとも簡単に俺を背負いこの部屋から出ていった。背中におぶられながらも俺は少し慌

てる。下ろして欲しい、と咄嗟に思ったが今ここで床に下ろされても自分一人では家に帰れないだろう。迎えの車は余り出したくないし…。でもこんな美少年に自分を背負わせるのも罰当たりのような気がして、居心地が悪かった。足首の痛みに痙攣が止まらず小刻みに震えながらも、俺はそれを必死に押し隠そうと深い深呼吸を繰り返してみる。やがて気持ちが悪く落ちてきたら、ふと自分の足首から赤い血がぼたりと白い廊下に垂れていることに気が付いた。振り返って今まで歩いて来た廊下を見つめる。赤い血が点々と床に落ちていて、それは偉く目立った。ハルヤが気づいているのかは分からない。ハルヤはエレベータの中に入ると迷わず一階へと降りるボタンを押した。俺は咄嗟に口を開ける。

「一度下ろしてくれ」

「……大丈夫？」

「平気だ」

ハルヤはおずおずとしゃがんでそつと俺を床に下ろした。狭いエレベータの中に座り込んで自分の足首を見つめる。血に赤黒く染まった足が変な方向に曲がっているような気がして慌てて目を逸らした。ハルヤは何も言わずに俺を見つめる。沈黙が漂うエレベータの中で、下へと降りる機械的な振動音だけがやけに耳に響いた。エレベータの中は白い。白くて、怖い。

「ごめん」

突如、透き通った美しい声がエレベータの中に響いた。俺は驚いて居心地悪そうに立ち尽くすハルヤを見上げる。何を言われたのか分からなかった。

「…ごめん？」

「俺のせいだ。俺と居ればマシが目をつけられることぐらい分かったのに、わざと知らないふりをしていた。だって…マシはたった一人の…」

何を言われているのか、分からない。俺は啞然と口を開けたままハルヤを見上げ続けた。何か大切なことを忘れているような気がする

る。(ハルヤと俺は、知り合いだった?)ハルヤが謝る必要なんてない。俺の足が今こんなにも痺れて痛むのは、俺が罰を受けるべき存在だったからだ。悪いのはハルヤじゃない。どうして謝ったりするのだろう?許して欲しいのだろうか。何かに罪を感じているのだろうか。分からない。何も分からない頭の悪い自分に苛々する。分からない。人の気持ち分からない自分が嫌いだ。むかつく。苛々する。ハルヤをそんな顔にさせているのが自分なのかと思うと、泣きたいような、やるせないような、自分を殺してやりたい気持ちになった。自分が許せない。俺は死ぬべき人間だ。

「ハルヤは悪くない」

「悪いさ!だつて俺は…!」

チン、

エレベーターが動きを止めて扉を開ける。

「…じゃあ、俺を病院に連れていってくれ。それで全部チャラにしよう」

ハルヤはどこか腑に落ちない顔のまま、仕方なさそうに頷いた。

「分かった」

またこの白い建物の中に戻ってきてしまった。医者は入院の必要性を説いたが、俺は無理を言つて通院に変えて貰う。学校には暫く行くなと言われた。車イスでも使うなら構わないのだろうか。出血はやや酷かったが骨自体には何の損傷もなく、どの道一週間程度で完治するらしいので、俺は特に何も気にしていなかった。

灰色の空を見上げる。今日もこの区画は天気が悪い。ベッドの中から窓越しに見つめた灰色の空。それでも外に出て見てみれば、中から眺めるよりかはいくらかは気分が良いものなんだろうと勝手に思っていた。確かに外の空気はあの室内の籠った空気に比べればマ

シだ。しかしやはり灰色の空には美しさの欠片も見つけられない。視線を落として目の前の街並みを眺める。見渡す限りに同じ高さのビルが乱立していて自分の居場所を見失いそうになる。苦手だったこの人混みも街並みも黒い地面も全て自分を不安定にさせる。どこを見ても知らない人間しか居ない。元より俺は知り合いが少ない。周りにいる他人みんなが俺を邪険にしているような気がしてならなかった。

「マシ兄」

突如後ろから聞き慣れた声が聞こえてくる。可愛らしい鈴の音のような声だ。俺は振り返って人混みの中から声の主を探した。すると電柱に背中を預けていた少年とも少女ともつかない、年下らしき子供とぴたりと目が合う。フードを深くかぶった子供はにこりと笑うとこちらに向かって手を振ってきた。そのまま此方に向かって小走りで寄ってくる。動作が一タ子供っぽくて愛嬌があった。まさに。と舌足らずな声で俺のことを呼ぶ。改めて間近で子供の顔を見ると、勝手に自分の口から彼の名前が滑り出ていた。

「ユタ」

待ち兼ねたようにユタは嬉しそうに笑う。

「久しぶりだね、マシ兄」

フードの奥に覗く青みのかかった黒色の瞳が細められた。ユタは松葉杖で歩く俺に気付き不思議そうな顔を見ると、矢継ぎ早に色々な質問をして来る。俺はそれに苦笑を洩らしつつも、二年間の退屈さを包み隠さずユタに語り歩いた。ユタとは子供の頃からの付き合いがある。そして彼はハルヤの血の繋がった弟であった。確か、そうだった筈だ。

ファミレスの中はいつだって騒がしい。暇をもて余した人々が店の中で雑談やらポーカールヤ居眠りやら好きなことを思いのままにしていた。ユタは禁煙席に真つ先に腰を下ろすと、ようやく目元ま

で被ったフードを脱ぐ。綺麗な白色の髪の毛がユタの無垢さをよく表していた。ユタの髪は白い。親からの遺伝なのだろう。ハルヤもユタも髪の色や目の色が変わっていた。子供の頃、ユタに髪の色で嫌な思いをしたことは無いのかと聞いたことがあったが、彼は「嫌なんかじゃないよ。だってお兄ちゃんと同じ髪の色なんだもん！まあ、お兄ちゃんの髪はもつと銀色って感じで僕よりカツコイインだけど、似てるってだけでも嬉しいや」とにこにこしながら言っていたことを思い出す。ユタはハルヤのことが好きであった。優しくてカツコ良くて自慢の兄なんだといつも豪語していた。そしてハルヤもそんなユタのことが好きである。両親を亡くした今となっては尚更、絶対に俺が守らないといけない大切な肉親なんだと力強く語っていた。素敵な兄弟愛だ。今時珍しいくらいなの。

「怪我は治ったって聞いたけど？」

ユタは言いながら俺の右足に目を遣った。

「いや、一回治ったんだけどその後すぐに怪我したんだ」

「また？」

ユタが呆れた顔をする。俺は苦笑いしつつも目の前のグラスに視線を落とした。表面の水滴がグラスを伝いテーブルへと落ちる。ユタは何気無く聞いてきた。

「どうして怪我したの？」

「え？」

突然、思考が停止した。頭の中が真っ白になって何も考えられなくなり、思わず片手で頭を抱える。地面がぐらぐらと、まるで津波が来ているかのように揺れている錯覚が起きた。イスに座っているのに揺れが激しくて身体のバランスが取れない。視界がぐにゃぐにゃと曲がり吐き気がする。店の中で吐くことは避けたい俺は咄嗟に俯いて強く目を瞑った。ガタン、と誰かがイスから立ち上がる音がする。頭痛がして床に倒れそうになる直前、ユタが俺の肩を掴んでよろけた体を支えてくれた。鈴の音のような、よく通る声が耳に響

く。

「大丈夫だよ」

大丈夫だと、ユタはそう言った。途端に今までずっしりと重かった体がふつと軽くなる。ユタの透き通った声に取り乱れていた精神が次第に落ち着いてきた。地面の揺れを感じなくなった俺はおずおずとユタの顔を見上げる。ユタは何かを思索するような顔で俺を見つめた。そしてどこか意味深に「そっか…」と小さく呟く。そのままユタは俺から視線を外し、もとの席へと腰を下ろした。

「変なこと聞いて、ごめんね」

ましにい。と後から付け足したユタの声はどこか弱々しかった。

「この二年間で変わったことに関して何か聞きたいことはある？」

「あー、取り敢えず皆が知ってるだろう出来事が聞きたい。事件とか、法律改正とか立案とか」

「良いけど、テレビやネットで見なかったの？」

「いや…なんか、見れなかったっていうか…」

「え？」

「見ようと思えば見れたんだろうけど…。自分からそれを催促するのが嫌で。んーなんか、本当に俺って子供っぽいよな…」

白い建物の中での生活を思い出す。誰も見舞いに来ない病室。鉄格子が付いた窓から覗く灰色の空。誰も見舞いには来ない。来れない。俺自身も部屋からは出れない。食事やトイレですら俺一人だけが使う個室が用意されていた。まさか感染症だった訳でもあるまいのだが、何故か俺は隔離生活を余儀なくされる。毎日知らない誰かから贈られる一輪の花だけが唯一の心の支えであった。一輪の赤い花。一年目まではずっと贈られ続けたのに、二年目からは見る事が出来なかった。赤い花。赤を見ていると心が落ち着いた。感情が高ぶる色の筈なのに、真っ白な部屋の中では白色の方が狂気を連想させる。異常な色だ。白は人工的な気味の悪さを持ち合わせていた。

「事件はね、あつたよ」

「どんな？」

「今年に入ってから集団撲殺事件が増える」

「あー…それってリンチ？」

「そうそう。それで五人がそれで殺された。全てこの区画内での犯行だから、犯人は同一の集団なんだと思われる」

「どうして集団で…」

「同じ意思を持った人間達の集まりだからだよ」

俺はユタの顔を見る。何故かその言葉に妙な違和感を感じた。

「…まるで知っているみたいに話すんだな」

「憶測だけだね。逆は無いと思うよ。意思がバラバラの集団は何度も殺人を繰り返せない。自分一人の犯行じゃないんだ。グループを連結する為の何か共通した目的が要る」

「はー、なるほど」

俺が感心して頷くと、ユタは場違いにニコリと明るく笑う。周りに今にも花が飛びそうさだ。

「被害者は男女共に年齢も多々。一番下は15歳の男子。一番上は32歳の女性。その次に、上から25歳の女性、23歳の女性、18歳の男子」

「詳しいな」

「何度も報道されれば嫌でも覚えるよ」

「犯人はまだ？」

「いや、捕まっただだよ一応。被害者の遺品に指紋が残ってて、犯行リーダー、共犯者共に全員逮捕。そしてそれが偶然にも今朝の二ユースの話」

「そうか、終わったのか」

俺はほっと安堵の息を吐く。

「それはどうかな？」

ユタは微笑した顔のまま俺に言った。全く、達の悪い冗談だ。

なんて思っていたのだが。

俺は唖然とテレビ画面を見つめた。ニュースキャスターが慌てた様子で記事を読み上げる。その画面の右上には小さく『何故また？連続集団殺人事件？』というテロップが表示されていた。19歳の女性が夜道で撲殺された。犯行手口が今までと似ていること、被害者の打撲殺傷の多さから複数人でのグループ犯行と判断された。警察は逮捕された殺人集団の末端か派生による犯行だと予測し、現在拘置所に在中の殺人集団に再度取り調べを行っているらしい。（末端か派生？）まさか。末端はともかく派生は無いだろうか。あんなキチガイ染みたことをする人間がそんなにもたくさん、しかもこの狭い区画の中に居る筈が無い。

（どうかな？）

ユタの悪戯っぽい笑みを思い出す。どうしてユタは、あんなことを？いや…偶然でも充分起こり得るな…。ユタは頭が良いし、俺には分からない何かがあるのだろう。一々気にしすぎだ。俺は少しばかり神経質になっているらしい。どうせ今日から一週間は学校に行けないんだ。ゆっくり休んでちゃんと疲労をとろう。そう考えて、俺は朝だと言うのに薄暗い部屋の中を見渡す。暫くの間ぼんやりとその場に突っ立ってから、ようやく電気を付けた。そのまま近くにあったボタンを押して、棚からトーストと目玉焼きの乗ったお皿を出す。更に別のボタンを押して冷たい水の入ったグラスをテーブルに出してから、俺は無造作に椅子に腰を下ろした。機械に作られた飯なんて美味しくはない。しかし自分で作る気はしなかったし、他に作ってくれる人も居なかった。俺は出来るだけ何も考えないようにしながら遅めの朝食を取る。淡々と咀嚼を繰り返しながら、もう学校に居るのだろうハルヤのことを考えた。何も無ければ良いのだが。不安が胸をよぎる。その不安を忘れようと、喉の奥に冷たい水を流し込んだ。

天使とは？

い。
(a . 美しい容貌をした殺戮体。 但し神話であり現実には存在しない。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806h/>

てんし(for me)

2010年10月25日07時52分発行